





特集

対馬の福祉を未来へつなぐ「伝える人たち」



超高齢社会を迎えた対馬において、介護人材の確保は避けて通れない大きなテーマです。

介護や福祉を担う仕事をしながら、介護をもっと身近に感じてもらいたいと、声を上げ続けている人たちがいます。学校での出前講座や体験学習を通じ「介護の魅力」を次世代へ発信する人たち。なぜ彼らは伝え続けるのか。地域の未来を紡ぐ「伝える人たち」の姿と、その取り組みをご紹介します。





全国的に不足する介護人材

超高齢社会を迎えた現代において、介護サービスは、私たちが住み慣れた地域で安心して暮らし続けるための大切な基盤です。しかし、今全国的に介護を担う「人手不足」が深刻な課題となっています。少子化による生産年齢人口の減少に加え、他産業との人材獲得競争や介護に対する根強いイメージなどが重なり、必要な介護職員の確保が追いついていないのが現状です。

介護人材の不足は今後も続く

2026年（現在）	2040年
必要数 約240万人	必要数 約272万人
約25万人不足	約57万人不足

厚生労働省：第9期介護保険事業計画に基づく介護職員の必要数についてより

なぜ「介護の人手不足」は続いているのか？

様々な業種で人材不足が叫ばれる現在、全ての職業の平均求人倍率が1.2倍なのに対し、介護関係職の求人倍率は約4倍と大きな開きがあります。その背景には、単なる採用難では片付けられない理由があります。

需要の急増 × 働く世代の激減

75歳以上の「後期高齢者」が急増する一方、少子化で支え手となる生産年齢人口（15～64歳）は減少。介護を必要とする人と、働く人の人口バランスが大きく崩れています。

さらに 対馬ならではの事情

本土と異なり、隣の市町村から通勤してもらうといった「広域からの採用」が難しい離島環境では、島内の限られた労働力で他産業と人手を分け合うことになります。

給与に関するイメージ

介護サービスの価格は国が定める「公的価格（介護報酬）」となっており、そこで働く人の賃金は安定しているといえます。しかし、都市部発の「給料が低そう」という先入観が先行し、選択肢から外れやすいギャップが生じています。





根強い「きつい仕事」のイメージ

ベッドへの移動をサポートする機器やタブレット（ＩＣＴ）導入などのＤＸ化が進み、医学・心理学に基づいた「高度な対人支援のプロ」へと進化していますが、その最新の姿が社会にまだ正しく伝わりきっていません。

介護の今を知ってもらい、介護を身近に感じてもらうために

昭和の高度経済成長期を支えた「団塊の世代」が全員75歳以上の後期高齢者になる2025年の介護人材不足を試算したことを受けた長崎県は、平成27年度に「介護人材確保戦略プラン」を策定、平成28年度からは、若手介護職員らを「介護のしごと魅力伝道師」として認定・登録し、県内の小・中・高校へ出前講座として派遣する事業が本格化しました。対馬市も島内の介護施設で働く人たちを中心に「対馬福祉介護次世代協議会」を立ち上げ、介護人材の確保に向け動き始めました。県内各地で協議会が作られましたが、官民が一体となって活動している対馬は、他の地域よりも活発に活動しています。



「対馬福祉介護次世代協議会」発足時の写真

「介護」をもっと身近に！若手介護職員の挑戦



島内各地にある福祉施設などで働く若手職員が中心となり、介護や福祉に関する様々な活動を行っています。

発信するだけにとどまらない「対馬モデル」の追求



協議会が作ったパンフレット

2019年にスタートした対馬福祉介護次世代協議会は、長崎県から認定を受けた「介護のしごと魅力伝道師」による、小学校から高校までの出前講座を中心に活動を行い、現場でのリアルなエピソードや魅力を発信してきました。

県内各地でも伝道師は活動していますが、個人が中心となって行う活動では、スケジュール調整の難しさや情報伝達の限界といった「点の取り組み」ならではの壁があります。対馬では、協議会が中心となって取りまとめることにより、ノウハウの蓄積など持続的な活動が可能となり、出前講座のほかにも、人材研修や他の団体との連携など「面の取り組み」を行っています。このような取り組みは、他の地域から注目を集めています。



情報発信やリーダー育成の研修も

協議会では、最先端の介護の仕事や制度についての研修はもちろん、情報発信や企画についての研修会や、リーダーを育成するキャンプの実施など、会員自らが成長できるような取り組みも行っています。

他業種×介護で新たな展開へ発展



島内の他の団体が行うイベントへの参加や協力を通して、より多くの人に介護について知ってもらう機会を作っています。

また、そこでつながった関係をもとに、介護の現場でも新たな取り組みを始めています。地域の人たちも参加できるイベントを開催し、地域の中での介護施設をその目玉として漁業者らに協力を依頼してマグロ解体ショーを開くなど、新たな取り組みにつながっています。また、地域との交流を行うことで、地域との距離をつめ、身近な存在へと変化させるきっかけ作りを行っています。

ライバルではなく、対馬の未来を創る仲間として



仕事が終わった夜に集まり、今後について話し合うメンバー

同業者として、採用や利用者の獲得で競合も起こりえる市内の介護事業所や介護職員たちが、事業所の垣根を越えて固く手を取り合い、対馬の未来を創る仲間として結集した協議会。「島の福祉の未来を守る」という強い危機感と情熱を持って立ち上がった立ち上げメンバーたちの志は、今、現場の次世代を担う若手・中堅職員たちへと確実に継承されています。

時代の変化に合わせてリーダーシップや役割を世代交代させながらも、活動の根底にある思いはぶれることがありません。初期の理念をしっかりと受け継ぎながら、若い世代の新たな視点とアイデアを取り入れることで、活動はさらなる進化を遂げています。人と志がつながり循環する組織として、対馬の福祉の未来を拓く歩みは止まりません。



学校での体験講座



対馬福祉介護次世代協議会 会長　俵 大典さん

これからの人生のきっかけになってほしい

介護人材を育成することを目的に、私たちの活動はスタートしました。超高齢化社会である現在、多くの人が介護を必要としており、介護に携わる人たちも多くいるのですが、まだまだ社会の中で介護について知ってもらえていない状況です。その中、様々なアプローチを通して、介護を知り、介護を身近に感じてもらいたいと活動を行っています。

介護とは、単に専門職としての仕事（職業）にとどまるものではありません。家族を思いやる気遣い、困っている隣人に手を差し伸べる優しさ、相手の尊厳を尊重する心、そうした日常のあらゆる場面に「介護の精神」は息づいています。

「対馬福祉介護次世代協議会」や「介護のしごと魅力伝道師」の活動が目指すのは、専門知識を伝えることだけではありません。学校での体験講座や地域での触れ合いを通じて、子どもたちや住民の皆さんが「介護」を特別なもの・遠いものではなく、自分たちの暮らしや生き方そのものに寄り添う「身近で温かい営み」として感じてもらうことです。

島の子どもたちが暮らしの中にある介護の心に触れ、一人の人間として、誇りを持って歩んでいけるような活動を行っていきたいと思っています。

介護のしごと魅力伝道師による講話依頼や異業種とのコラボなど、活動に関するお問い合わせは
長寿介護課　☎0920(58)1118 まで